

研究主題

分かる・身に付く授業を 創造する授業改善

練馬区立練馬第三小学校

1 研究主題設定の理由

「学習が身に付く」とはどういうことだろうか。一般的には、学んで知識を理解したり記憶したりすることを「学習」と言っている。つまり、学習指導要領でも「学力の重要な要素」として掲げられている「知識・技能の習得」、そして「知識・技能を活用して思考、判断、表現すること」が、学習内容の定着（学習が身に付く）に大きく関わっていると言える。

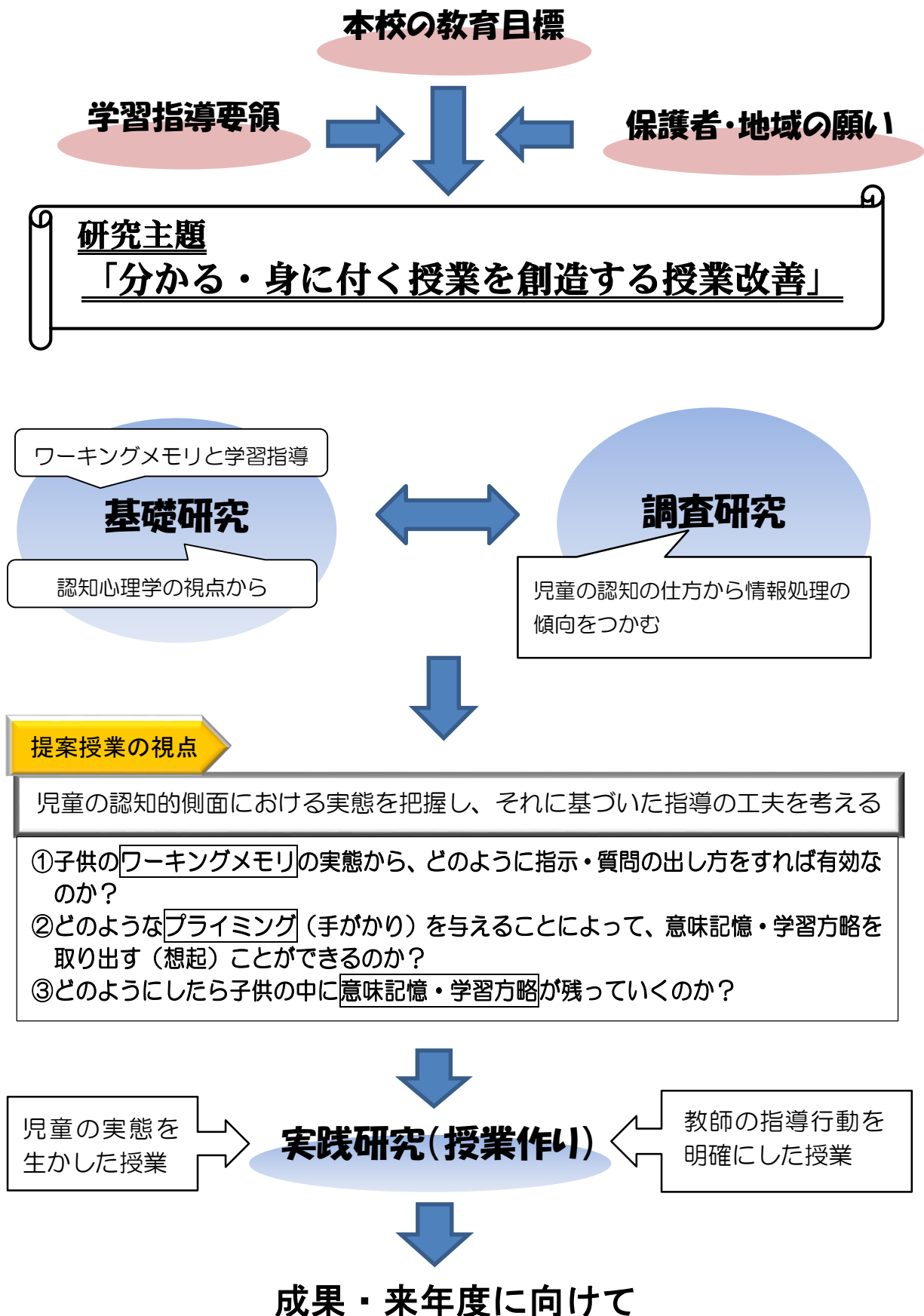
小学校では、1年間の授業時数が、低学年では約900時間、中学年以上の学年では約1000時間にもなる。この毎日・毎時間の授業が、児童にとって「分かる」授業となり、「楽しい」だけではなく、学習内容がきちんと「身に付く（定着する）」授業であるということが、確かな学力へとつながる王道であると考えます。

また、通常級に在籍する特別な教育的支援が必要な児童の割合は、約6.5%とも言われている。つまり、今学校では、異なる特性や実態の、児童個々に応じた「分かる・身に付く授業」を行うことが求められている。そこで本校は、児童の認知スタイル（ここで言う「認知」とは、感性に頼らず思考・推理などに基づいて対象物を解釈する情報処理のプロセスのこと）に着目して児童の実態を理解し、実態に即した指導の在り方を追求するとともに教員の指導力向上を目指そうと考えた。

そこで今年度は、研究主題を「分かる・身に付く授業を創造する授業改善」とし、まず、先行研究や文献から「分かる・身に付く授業」を行うための手がかりに迫ることとした。そして、一方では、認知的側面から児童の実態を把握し、その分析をもとに「分かる・身に付く授業」にするための指導の在り方を探ることとした。今回は、情報の入り口としての「聞く」「見る」「読む」活動の児童の実態を調査し、各学年の情報処理の傾向をつかんだり個別の支援を考えたりして「分かる・身に付く授業」づくりに生かしていこうと考えた。



2 研究の構想



3 研究方法

(1) 基礎研究

先行研究や先行文献から認知と学習の関係について理解を深める。

(2) 調査研究

「聞く力」児童イメージ調査

① 読解力テスト

② リーディングスパンテスト

③ リスニングスパンテスト

④ 文章記憶（長期記憶）テスト

(3) 実践研究

各学年1回ずつ計6回の研究授業を実施し、認知スタイルに応じた指導の在り方を研究する。

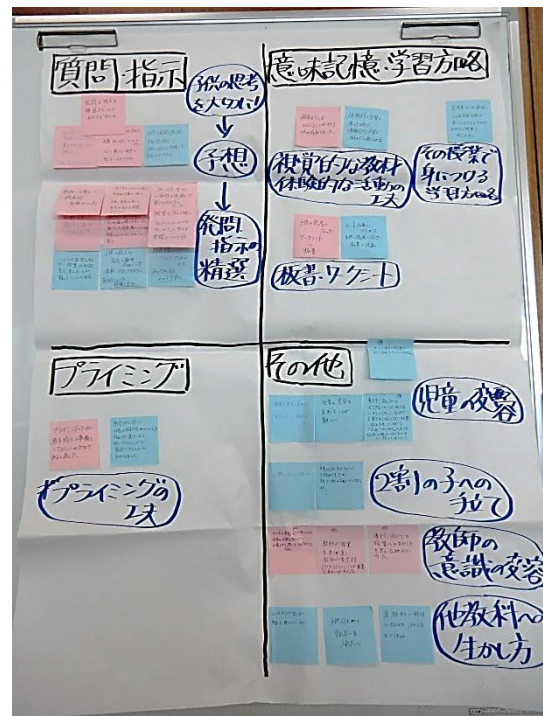
4 提案授業

国語科の説明文を通して、児童の認知を基に研究の視点を明らかにし、様々な手だてを考えて研究を深める。

5 研究協議会

(1) 分科会より提案された授業の視点について、気付いたことを各自付箋に記入する。

(2) 2グループに分かれ、付箋を分類し、項目ごとにまとめて協議を深める。



(3) 模造紙にまとめたものを基に全体の中で発表し、講師の指導を受ける。

6 研究経過

講師 帝京短期大学講師 芳賀 明子先生

研究日・研究全体会	
4月	16日(水) 講演会 「今年度の研究について」
5月	14日(水) 講演会 「調査研究の方法について」 ①リスニングスパンテスト ②リーディングスパンテスト ③記憶についての調査
6月	25日(水) 研究日 分科会ごとに調査結果の集計
7月	2日(水) 講演会 「調査結果の考察のしかたについて」
9月	24日(水) 研究授業 5校時 第1学年 单元名 みんなで よもう 学習材 「みいつけた」
11月	12日(水) 研究授業 4, 5校時 第3学年 单元名 せつめいのしかたを考えよう 学習材 「すがたをかえる大豆」 授業者 渡邊 佳恵教諭 第4学年 单元名 説明のしかたについて考えよう 学習材 「アップとルーズで伝える」
12月	17日(水) 研究授業 4, 5校時 第2学年 单元名 読んで、せつめいのしかたを考えよう 学習材 「しかけカードの作り方」 授業者 大拙 奈穂子教諭 第5学年 单元名 説明のしかたについて考えよう 学習材 「天気を予想する」
1月	28日(水) 研究授業 5校時 第6学年 单元名 文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう 学習材 「生き物はつながりの中に」
2月	25日(水) 全体会 今年度の研究のまとめ 次年度の研究に向けて

7 研究を通して明らかになったことと次年度に向けて～

(1) 研究を通して明らかになったこと

『学習が身に付く』とはどういうことだろうか。」と、改めて授業を児童の視点から見直すことを通して、指導の在り方を探ってきた。

まずは、先行研究や文献から、「分かる・身に付く授業」を行うための構成要素を洗い出した。次に、認知的側面から児童の実態調査を実施、把握し、「指示・質問」「プライミング・想起」「意味記憶・学習方略」の三つの視点で授業改善に取り組んだ。これらを基に、実践研究を通して、研究主題である「分かる・身に付く授業」を行うためには、授業の中での児童の思考の流れを妨げない教師の指導行動が重要であることが分かった。

本研究を通して、日々の授業の中で、「児童にとって分かりやすい指示・質問の言葉を意識するようになった。」「言葉の言い換えや繰り返しをしない。」「児童に何を残したいのか意識して教材研究をした。」と教師の意識の変容が大きな成果と考える。

また、「キーワードにすすんで線を引く」「本文に立ち戻って理由を説明する」など、学習方略を獲得した児童の姿が多く見られるようになったことも成果と考える。

(2) 次年度の研究で明らかにしたいこと

今年度、最後の研究全体会では、1年間の研究について3つのグループに分かれて協議を行い、改めて振り返った。「他教科にどのように生かしていくのか。」「どの子にも分かる授業として手だてや支援を考えたが、果たして、勉強が得意な子も満足しているのだろうか。」「実態調査結果をもう少し、授業の中で活用できるとよかったのではないか。」など、課題として出されていた。

今後は、今年度の研究を基に、「分かる・身に付く授業」となるよう、以下の4点を実践研究を通して深め、授業改善を図っていく。

- ①認知的側面からの手だてや支援と教科のねらいの達成に向けて
- ②小学校6年間を見通した系統的な「分かる・身に付く授業」をするために
- ③意味記憶・学習方略との関連
- ④主体的な学びへ